
恋愛株式会社 上

エンジェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛株式会社 上

【Nコード】

N2243I

【作者名】

エンジェル

【あらすじ】

私はさえない高校2年生でも あの日から いろいろ変わった

「はあ」

私はさえない高校2年生の 黒瞳 はずみ（くるひとみ はずみ）
今日は、朝からため息ばかり・・・ 彼氏もできないし
暇だし...

「はずみ!!!おっはよおん!!!」

「あ・・・百合おはよう・・・」

この子は 坂崎^{さかざき} 百合^{ゆり}いつつも元気な私の親友

「ねえ 聞いたよお はずみめっちゃ持てるんだって?」

そうなのだ・・・ だからダメなのだ みんないわく私は モテる
(?)らしく

彼氏ができて告白されて 最終的に別れてしまっただけ... 切ない
よお・・・

「ねえ はずみ 聞いている?」

「あ・・・うん聞いている・・・」

「はずみのファンクラブの会長さん変わったんだってねえ?」
百合が言った

「へえそうなんだあ・・・ってえええええええ」

「ファン・ファン・ファン・・・ファンクラブウ?」

「どうしたのはずみ?」

「ファン...ファンクラブ?????」

動揺したように聞くと

「うんはずみのファンクラブあるんだよあ...知らなかったのあ」

「う・・・うん・・・知らなかった」

まじかよ ホントにホントに知らなかった・・・

「そうなんだあ ってか知ってようよそこは・・・」

あきれたように百合がいった

「もうこんな人には 付き合ってらんないよお 早くいくよ??」

百合は私の手をつかんで走った
そんなこんなで私の学校生活は始まった・・・

第一章 恋愛株式会社???

学校では 案外優等生

学級委員もやってるし・・・
つてかやらされたんだけど・・・

はあ疲れた・・・ さっさと帰ろう

「いずみー 一緒に帰ろう?」

百合が話しかけてきた

「いいよ〜ん」

「つてか いずみハンカチ持ってる?」

「え? たぶん・・・ 何で」

私がきくと百合が

「いやあさつき山菜に水掛けられちゃって・・・ 貸して!...!」

「いいよ待ってね」

ポケットを探った あれない・・・

「ない...」

「どうしたのいずみ?」

「ハンカチがない!...!」

ないよどうしようあれは...

「私探してくる!...!百合は先に帰ってて!...!」

「え・・・いずみ・・・まあいつか帰ろう・・・」

あれは だめなのに あれは一目ぼれした あの人からもらったハ
ンカチなのに

きつと運動場だ探さなきゃ!...!

「ないよおどうしよう...」

涙が出てきた・・・

「大丈夫ですか??？」

「へ・・・?」

「どうぞ」

そう言つてその人はハンカチを渡してくれた

「あ…あつたあ」

「どうしたんですか?」

「このハンカチどこで?」

「え?そこに落ちてて・・・」

よかつたあ見つかつたうれしい!!!

「拾つてくれてありがとうございます!!! あのお名前・・・」

「僕はこういうものだよ?」

名刺を渡された

恋愛株式会社 鈴木 秀一 (すずき しゅういち)

「どうも・・・ あの!!! このハンカチすんごく大事だったんです何かお詫びできませんか?」

「じゃあ会社に来てよ? いいよね」

えつとどうしようかなあ なんかされたらどうしよう・・・

「大丈夫ですなんもしませんよ? 来てください」

「わ…わかりました。」

第二章 わたしだけの王子様

「ここです」

秀一さんに言われて 見上げると スンごく大きなビルが目の前に
!!!!

「行きましょう」

「とりあえずここで いろいろやってください」

言われて 入れられた部屋は 全面曇りガラス張りの部屋だった
真中にタッチパネルがあつた 多分これのことだろう

当てはまることをどんどん押し去っていった。すると扉があいて

秀一さんが待つていてくれた。よく見ると秀一さんはスングクカツ
コイイ人だった。

「お疲れ様!!!」

「は・・・はい」

「もうすぐ来るから待つててね?」

「誰がですか?」

私は意味が分からなかった。

「君だけの王子様だよ?」

「へ?」

「さっきいろいろやったでしょう。あの部屋で?」

「はい・・・」

「それで私だけの王子様にしたい人で、誰かを選んだでしょう?」
そうだった。つけあつまり記憶がない・・・

「秀一さんっていくつですか?」

「僕? 僕は20だよ?」

につこりと笑ってそういつた。秀一さんの顔はすんごくかわいかった。

「君あ17歳だよね??」

「ハイそうです...」

「そんなに歳離れてないね?」

「そうですね・・・」

私はにつこりして答えた。

「秀一さんは彼氏いるんですか?」

「いないよ残念だけど、僕は理想が高いんだよね。抱かれこの会社
でも見つけれなかった...」

「ここって何なんですか?」

私は聞いた。

「ここはね彼氏のいない、男の子たちの中で、最もカッコイイ子だ
けを集めてその辺にいる彼氏のいない、女子高生を、幸せにしよう
!!!みたいな感じの所だよ?」

秀一さんは教えてくれた

「あ…待っててね？」

秀一さんは席を外してしまった

「おいで　いくよ？」

「え…」

秀一さんと一緒に　ある場所絵向かいながら　話をした

「どこに行くんですか？」

「ああ　着替え室だよ？」

「なんで？」

「さっきの質問であつたはず」

そうだつけえ…

「とりあえず今日は　自己紹介して食事して送ってもらつだけ
親には報告しといたよ？」

「え…」

「まあまあそう動揺しない　もちろん相手も自分も了解しないと
王子様にはなつてくれないよ？」

別にならなくてもいいんだけどなあ

「お金かかるなら無理なんですけど…」

「大丈夫　無料だよ」

ニツコリした修二さんの顔がいまだに忘れられない…

「ああ相手のプロフィールね？」

私は　紙を渡された　中には

中山　皐（なかやま　さつき）と書いてあつて　身長や血液型の
どが書いてあつた

「着いたよ？」

「え？」

「え？　じゃなくて　さあ行ってらっしゃい」

「秀一に背中を押されてはいるとそこには　二人のメイドさんがい

て・・・

私のことを見るなり きゆうし襲いかかってきた

数秒後 わたしは 自分とはかけ離れた姿を鏡で見た

「カッコワイイ・・・」

メイドさんが 九に声を出した

「私じゃないみたい・・・」

鏡を見ていると

「入っていい？」

秀一さんの声がした

「どうぞ？」

「お邪魔しま・・・」

秀一さんは入るなり私を見て 顔を真つ赤にさせていた

「ああ 相手の子もうちてるよ？ 右に3つの部屋だから」

そう言っ秀一さんは 出て行っってしまった

右に3つ の部屋の前で 一息置くそして

コンコン

「いいですか？」

「どうぞ」

「こんにちわ」 私はす言っ中に入った

「こんにち・・・」

言葉を詰まらせている

「どうかしましたか？」

「すっごくかわいいね？ おれの理想そのものだよ？」

「ありがとう」

私んはにっこりして 臯くんの前に座った

臯くんは 私の予想以上に恰好よかった

「あのさあ・・・」

臯くんが きゆうにしゃべった

「何？」

「いずみっ呼んでいい？」

学校でいずみなんて呼んでくれる人は 百合くらいしかいない
他には モテ子とか いずみ様とか だからスongoく嬉しくって

「いいの いずみって呼んでくれるの？」

「うんだからおれのことは臯ってよんで？」

「わかった」

臯は顔が赤かった

そして食事が終ると

臯はいっぱい話してくれた まっるで初めて会ったとは思えないくら
らい

臯は私と同年なんだって でも 私のクラスにこんな

格好いいのはいない

そしてメールアドレスを交換した

臯は家まで送ってくれた

「送ってくれてありがとう」

「ねえいずみ」

「なあに？」

「俺さあいずみにマジで惚れたんだけど 付き合ってくんない？」

私は急な告白にびっくりしたでもうれしくって

「うん 私も臯が好きだよ」

そういった

するとさつきが急にわたしの近くにきて

「ありがとううれしい」

そう言って私にキスした 短くても思いのこもったキスを・・・

「じゃあね」

「うんバイバイ」

私はすぐうれしくなった

本当にわたしは臯が好きみたい

でも このあと こんな風に思っていられなくなるなんて・・・

(後書き)

まだ下があるので

よかったらつづ気もいまかいてるんで読んでください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2243i/>

恋愛株式会社 上

2010年10月15日14時27分発行